

記念講演

現代日本の社会問題を読み解く視点 —アジアの社会福祉から学んだもの—

立命館大学国際関係学部教授 桂 良太郎

1. 今なぜ「アジアの社会福祉」か

わたしは平成元年から16年間、奈良大学に勤めておりましたが、この間、1994年から95年にかけて、シンガポールでアジアの社会福祉の実情を学ぶ機会がありました。それまで私は欧米の社会福祉に関心をもっており、特にフランスの家族政策についていろいろ調べたりしておりました。高齢者が安心して暮らせるまちづくりを考えるためには、勿論欧米社会のことも学ばねばなりません。このシンガポール留学を機会に、アジアの社会福祉からも学ぶということの意義を見出し、その後アジアから大いに学ぼうと毎年アジア、特に東南アジアの国々と往復する機会にめぐまれました。

シンガポールではまた、いろいろな他のアジアの国々の人々と出会うことができ、またベトナムでは、二重対児のベトナム・ドクさんを支援する会とも出会いました。長引いた戦火を耐え忍んできたベトナムの人々にたいへんところが動かされ、戦争体験者たちの高齢化や老後の問題についても強い関心を持つようになりました。

2. 現代社会を脅かす「3つ（自然体、生物体、社会体）の核」の危機

わが国では今年2011年は大きな自然災害が降り懸かってきました。巨大地震による大津波、それによる原発損壊がもたらした放射能汚染、さらには9月、奈良県等で台風12号の豪雨による土石流の発生です。今年ほど、これまで人類が築いてきたさまざまなシステムが根底から見直されねばと感じられた年はないと思います。このほかにも、国家の財政破綻を匂わせるような危機感も世界中の人々を感かせ不安に陥れています。私たちはこれまで国、行政、企業に期待を寄せてきましたが、結局、資本主義、社会主義も行き詰まりをみせていることを痛感しました。

このような国の内外の危機に、いまこそ人類は地球の自然や文化の多様性から、平和と福祉の基本にたった「平和—人間と自然との共生—主義」の大切さを強く感じます。こんにち広島、長崎での原爆被害は忘れられようとしています。3月の原発事故から、核の恐ろしさをあらためて知りました。又わたしは科学技術の進歩が、原爆を生み《物質の核の危機》、さらに生物化学兵器を生み出したこと、そしてさらに、遺伝子操作等による食物や、生物世界への弊害《生物体の核の危機》を危惧しています。3番目の核の危機として《社会の核の危機》、こんにちの自殺者の急増や家族解体を挙げたいと思います。この社会の核としての家族の福祉的課題にはメアリー・リッチモンド女史を出すまでも

なく、世界のソーシャルワーカーが国、宗教を越えて取り組んで来ました。これからも協力していかなければなりません。きょう皆さんにお伝えしたいことは、NPOの重要性です。これ以上、国（政治）や企業（経済）に振り回されないためにも、それぞれのNPO(地球市民団体)がミッション（使命）を掲げて文化力や社会力でもって今日の危機的状況に立ち向かうことが求められています。なかでも日頃思うことは、青年たちをどう変えるか、子どもたちをどう育むか、これまで築き上げてきた平和主義に基づいて、国や宗教を越えて考え直さねばならないことです。

3. 欧米とアジアの家族比較研究から学んだもの

東南アジア、とりわけシンガポール、ベトナムでの家族研究・調査から、アジアからわれわれソーシャルワーカーは学ぶべき知恵がものすごく多いことを知りました。エマヌエル・ドット氏の欧米の比較家族論からは、欧州の家族も一枚岩ではなく、国ごとに家族システムが異なっていることを教えられます。しかし一方アジアの家族についても、中国、韓国、日本、ベトナムにおいて、中国の「孝」、韓国の「仁」、日本の「忠」、そしてベトナムの「義」をそれぞれ基軸とする概念が存在し、それぞれの国で互いに社会的文化的背景の異なる家族観が存在しています。そしてこんにち、欧州やアジアにおける多様な家族生活は、グローバリゼーションの影響のもとにおおきく影響を受けようとしています。グローバリゼーションはまさしく、欧米の「個人」と「社会」との対等性、平等性を両極的においた人権や自由を追求する考え方で、物質的、経済的に人々の豊かさをめざしますが、アジアは、「個人」と「社会」のあいだに「家族やまち」といった緩衝的な集団や地域共同体空間が根強く作用し、いい意味でもわるい意味でも人権や自由といった欧米の価値観と異なる、そのまま受け入れない拮抗文化のようなものが存在しております。今日過度のグローバリゼーションによって、伝統的な家族規範が破壊されるなど、地域社会の人間と人間、また人間と自然や風土が保持してきたすばらしい伝統文化との「絆」が、このグローバリゼーションでもって疎遠な状況下におかれようとしております。

日本の家族システムの特徴は「忠」という概念がいまだに日本人のこのころのベースにあります。ジェンダー論を説く方々から猛烈な批判を受けています。私はかつて兵庫県福崎町にある短期大学に勤めた5年間に、その町が生誕の地である柳田国男氏の民俗学から多くの研究的示唆を学びました。「日本一小さな家」に生まれた柳田は、アジアの中で日本家族システムの独自性を、男中心の家父長制のうちに見出しました。そのなかの「長子相続」、「祖先崇拜」、「家を思うところ」など、こうしたことは中国の人々にとっては、中国におけるそれらとは異なり、なかなか理解できないものであることに気づかされました。同様に、日本人にとっても、中国の「孝」の考え方は理解しにくい概念かもしれません。ここに国を異にする文化の違いを学ぶ異文化理解教育の重要性が存在しています。



桂 良太郎氏

グローバリゼーションは、欧米の「個人」と「社会」との対等性、平等性を両極的においた人権や自由を追求する考え方で、物質的、経済的に人々の豊かさをめざしますが、アジアは、「個人」と「社会」のあいだに「家族やまち」といった緩衝的な集団や地域共同体空間が根強く作用し、・・・拮抗文化のようなものが存在します。・・・地域社会の人間と人間、また人間と自然や風土が保持してきたすばらしい伝統文化との絆が・・・

今回の大震災で東北、とりわけ「遠野物語」のふるさとはおおきな被害をうけました。グローバリゼーションと大災害でこの東北、とりわけ遠野の素晴らしい自然や伝統文化社会の復興は、われわれ日本人の未来への課題を象徴しているように思われます。

4. 現代社会を読み解く「Kのパラダイム」と里山学(地元学)へのまなざし

わたしは20代に「人類学」、30代では「社会学」を、40代に入って「社会福祉学」と出会いました。50代でははじめて「平和学」なるものと出会うことができました。今60代を迎えて実は、「里山学」というものを目指したいと考えています。それは、柳田国男の「遠野物語」との出会いからです。「里山学」は、人間が自然とともに生きてきた過去を振り返り、未来にわたって、人間が人間らしく生きること、自然の豊かさなどが、どのようにすれば関連しうるか、その可能性を探求する学問だからです。そして、里山学は何よりも、環境問題の解決に寄与する知の努力の一環であり、持続可能な社会の実現を目指す「福祉学」と「平和学」をむすびつける『実践の学』でもあります。いま私の生駒市の自宅の近くに茶筌の里山で有名な「高山」というところがありますが、その高山の里山に生育する竹、茶、米などによって培われた文化を抜きにしては、外国人に日本文化を語れないことに気づきました。つまり「Think Globally but Act Locally」の具現化です。地に着いた「文化力」を身につけ、自分が何者であるかということや外国語で語ることの重要性が、私たちにいま求められているのではないのでしょうか。日本のような里山文化は中国や韓国には見られません。日本の文化力を自分のものとし、他方、外国の文化力を学ぶためにも、私たち一人ひとりはその関わった地域の伝統文化や風土の特性または、「感性」といったものを知ることが大切になってきました。私はあえてそのような活動を「地元学」(足が地に着く学問)と呼んでいます。

配布した資料に書きましたが、「高度情報消費社会」、「高速高齢少子社会」、「国際化(地球化)社会」、「環境」、「健康」、「観光」、「介護」、「教育」、といずれも、頭文字はすべて『K』から始まるキーワードです。そしてこれらの用語は、根本的には本当に人の身体に触れる「ケア」が解っている人々によって、「家族」や「地元(コミュニティ)」の再生が根本です。「官」による制度的システムだけでは意味がありません。このことから“官制”システムに圧倒されない個々人の“感性”の豊かさの大切さを強調しておきます。ここで「感性」とは、一人ひとり、自分の人生を振り返り、自分の生きざまを見直し、これをアート(Art)化することです。つまり経験智を実践のレベルまで磨き上げることです。英語で地球を「EARTH」と書きますが、この単語の両端のE(経済のeconomy, 環境のenvironment)とH(健康のhealth, 幸福のhappiness)を“ART”が結んでいるのだということを学生によく話します。その人らしい生き方、技、知恵、経験、等、生きて得られた「感性」をアートと呼びたいと考えます。その感性をエネルギーとして大切に保ち、現代の若者、とくに最近では、男の子たちの感性をより豊かなものにしていくことが大切ではないのでしょうか。いまや女子学生より男子学生を元気づけることがわれわれソーシャルワーカーの課題かもしれませんね(笑)。ソーシャルワークの「アート」(経験智としての英知と匠)とはなにかまたいつかみなさんと論議できれば幸いです。

本日はご静聴ありがとうございました。

コメント

近隣アジアと日本の福祉を考える

コメンテーター：浅野 仁
関西福祉科学大学教授
1979年カラマズー

桂先生、ご講演有り難う御座いました。アジアの社会福祉についてお話を伺いましたが、私が楽しみにしていたことは、なぜ今アジアの社会福祉を研究するのか、ということをお自身が考えてきましたので、それを伺いたいと思っていました。

C I Fのメンバーは例外なく欧米の福祉事情を研修してきました。私もC I Pを出発点に、欧州各国を研修させていただき、欧州の福祉にどっぷりつかってきたと言えます。そのなかでいつも疑問に思っていたことは、欧州の福祉事情そのものをみれば日本より遙かに進んでおり、学ぶものがたくさんある。ソーシャルワークの技術ばかりか制度そのものが、非常に進んでいるわけです。さてそれらをアジアの諸国に誘導したときに、日本にとってどのような意味があるのだろうか、またそれに関してどのような研究上の意味があるのだろうかと考えてきました。

何年か前から、近隣のアジア諸国の福祉を研究することが大切ではないかと思ひまして、中国、韓国、台湾など東アジアの国々と日本との福祉事情の比較を試みてきました。

先ほどいくつかが桂先生がアジア各国の共通点に触れられましたが、最近、アジアの高齢者ケアの実態について、中国、韓国、日本の比較研究を行いましたので、それについて少し触れたと思います。これら3ヶ国について比較研究する意味というのは、大きくは三つの共通点があるからです。ひとつは少子高齢化です。日本はその先頭を走っていますが、韓国は世界でもっとも出生率が低いとされており、中国はひとりっ子政策による少子化です。二つ目は経済発展の状況です。他のアジア諸国に比べて（シンガポールは別として）中韓日の発展は凄まじいといえます。三つ目は文化の問題です。福祉の

関わりの中で文化をとらえるのは難しいのですが、生活習慣、生活意識、宗教などには文化的共通点があると見ていました。ところが調査を詰めていく中で、桂先生の話にもあったように、随分違うことが解りました。例えば、帰属集団としての家族の重要性を尋ねると、三ヶ国ではいずれも90%以上がそうだと答えるのですが、高齢者福祉に関して、「自分の老親を老人ホームに入所させるか」という設問について、中国の人たちの7割が、「親の入所を容認する」と答えました。それに対して日・韓の人たちは5割弱が容認したにすぎません。親に対する子どもの意識に差が認められます。また例えば、自分の親が最期を迎える場所についての考えを尋ねると、中国では4割以上の方が施設を挙げました。これに対して日・韓では1割強が施設を挙げたにすぎません。

三ヶ国は儒教を共通の文化的背景とする国であるといわれていますが、そのような差が見られました。近年、中国では経済発展が急速に進んでおり、共働きが増え、女性の意識にも日・韓との違いが顕れていると思います。そこで、このような差がどうして生じるのか、さらに研究しているところです。

こうした国際的比較研究は、今後の日本の福祉をどうすればよいかを考える上に、活かしていく必要があります。研究を進めるなかで、上海市の福祉特区における先鋭的な福祉政策にも目を止めました。そこで行政による指針として「9073」が掲げられていました。この数字の意味は、本人や家族による「自助90%」、「共助7%」、「公助3%」、ということです。わたしはこれを見て驚きました。これは制度上、公助や共助の比重が多い日本と比べるとどうなのかと思いました。日本は今後どのような途を歩めばよいのか、そのことを考えるについては、隣国中国の政策の推移と現実にも関心を向けなければならないと考えているところです。

桂先生の視野の広いお話にコメントを差し上げねばならなかったのですが、自分の知るところを話させて頂きました。ご静聴ありがとうございました。

(兵庫県在住)